

アスリートの躍動を記録するスポーツ・グラフィックス

Extreme

PRESS by AJPS

【エクストリームプレス】

Vol. 5 2012
Summer

特集 TWO WHEELS

The Heat

～白熱の果てに～

FREE

ご自由に
お持ちください

Extreme

PRESS by AJPS

「日本スポーツプレス協会」(Association Japonaise de la Presse Sportive)は、1976年に発足した。第一線で活躍するフォトグラファーとジャーナリスト約170人が所属している。http://www.ajps.jp

【エクストリームプレス】
2012 Summer
Vol.5



[Cover Photo]
高須 力/レッドブル・コンテンツプール
Tsutomu Takasu / Red Bull ContentPool
スタントバイクの欧州王者クリス・スライファアが来日したときのカット。仰向けに寝転んで魚眼レンズを使用していたので僕自身に恐怖はなかったけれど、クリスが僕の頭の先1メートルをトリックしながら通過するのを見ていた周りのスタッフはかなり肝を冷やしたらしい。
2006.9.21、東京タワーにて、Canon EOS-1D Mark II、EF15mm F2.8-fisheye/スピードライト580EX、1/250、F8、ISO100、ホワイトバランス オート、サンディスク エクストリームIIIコンパクトフラッシュカード

CONTENTS

巻頭エッセイ Vol.5 「モータースポーツの熱」

尾張 正博 / 文 Text by Masahiro Owari
楠堂 亜希 / 写真 Photograph by Aki Kusudo

Moments

The Heat ~白熱の果てに~

水谷 たかひと / 写真 Photograph by Takahito Mizutani
楠堂 亜希 / 写真 Photograph by Aki Kusudo

Close Up

「勝利は自分で引き寄せるもの」

佐藤 寿宏 / 文 Text by Toshihiro Sato
水谷 たかひと / 写真 Photograph by Takahito Mizutani
楠堂 亜希 / 写真 Photograph by Aki Kusudo

Impression

「摩天楼に集う銀輪を高解像度で写し撮る」

井上 六郎 / 写真・文 Photograph&Text by Rokuro Inoue

Publishing AJPS (Association Japonaise de la Presse Sportive)
Publisher Akito Mizutani
Editor in Chief Yoshio Kato・Shinichiro Tanaka
Editor Rokuro Inoue・Tetsushi Ono・Aki Kusudo・Kenjiro Sugai・Tomohiro Watanabe
Editorial Coordinator Asuka Senaga
Design Futurature, LLC

Photographers
高須 力 TSUTOMU TAKASU
1978年3月生まれ。東京都出身。2002年より独学で写真を始めJCJ主催「水谷塾」を経てフリーに。サッカーを中心に様々なスポーツを取材中。
https://takasutsutomu.com

水谷 たかひと TAKAHITO MIZUTANI
1968年、東京都生まれ。1990年に東京総合写真専門学校を卒業後、ヨーロッパに渡り、オリンピック、モータースポーツなどを取材。帰国後は、スポーツイベントなどを追いかける。株式会社マインスポーツ出版代表取締役。

楠堂 亜希 AKI KUSUDO
1972年8月生まれ。和歌山出身。東京工芸大学卒業後、2輪のモータースポーツを中心に幅広く活動。Moto GP世界選手権、AMAスーパークロスなど海外撮影の経験も豊富。自宅スタジオで通常の撮影業務もこなす。

2011.4.8、全日本モトクロス選手権にて、Canon EOS-1D Mark IV、EF70-200mm F2.8L IS II USM、1/1000、F8、ISO125、ホワイトバランス マニュアル、サンディスク エクストリーム プロ コンパクトフラッシュ カード



Moments The Heat ~白熱の果てに~

「モータースポーツの熱」 尾張 正博

日常生活は「静」の連続である。授業中、生徒たちは静かに先生の話を聞く。通勤途中の会社員たちは駅の構内で肩をぶつけ合いながらも、冷静に対応する術を身につけている。「静」は、社会を営む人々が平和に、快適に生活していくために作った、暗黙のルールである。だからこそ、時に日常生活を忘れて、非日常の世界へ足を踏み入れてみたくなる気持ちは、私たちの心にはどこかに存在している。それがスポーツを観戦する動機のひとつであり、モータースポーツはその中でも究極のスポーツかもしれない。

モータースポーツが非日常的なスポーツと言われるのは、選手たちが使う道具に理由がある。一部のアマチュアレースは市販の車体と同じものを使用するケースもあるが、そのほかのほとんどのレースは、レギュレーション(規則)に即ってカスタマイズされた車体を使用する。公道を走ることを許されない車体を、人々はマシンと呼び、現実離れしたスピードもエンジンから発せられる甲高いエキゾーストノートにエクスタシーを感じる。人々がモータースポーツに魅せられるのは、マシンのスピードや排気音だけではな

い。サーキットには、日常生活ではなかなか経験できない「熱」が存在しているからだ。それは、ライバルよりもコンマ1秒でも速く走るための徹夜でマシンを調整するチームスタッフの熱であり、そのマシンを限界でコントロールする選手が発する熱である。しかし、限界は常に危険と隣り合わせにある。それ故、モータースポーツを愛する者もまた、熱い想いで彼らの戦いを見つめる。命を懸けて戦う——それがモータースポーツの熱である。

Moments

The Heat

～白熱の果てに～



↑ 橋堂 亜希・写真 Photograph by Aki Kusudo

2011年にチャンピオンとなった藤原克昭に加え、今シーズンからは清成龍一が参戦。タイ、インドネシア、マレーシアなどアジア諸国のハングリーな選手が毎戦繰り広げるトップ争いは、まるで全盛期の日本を見ているようだ。

2012.5.13、アジアロードレース選手権・マレーシア・セパンサーキットにて、Canon EOS-1D Mark IV、EF500mm F4.5L IS USM、1/1000、F10、ISO125、ホワイトバランス マニュアル、サンディスク エクストリーム プロ コンパクトフラッシュ カード

→ 橋堂 亜希・写真 Photograph by Aki Kusudo

15分プラス1周という短いレース時間で勝つためには、スタートで誰よりも前に出ることが重要なので、1コーナーのトップ争いは毎回し烈を極める。ある意味男子のレースよりも激しく、最も緊張する瞬間！

2012.4.22、全日本モトクロス選手権・レディースモトクロスクラス（オフロードビレッジ）にて、Canon EOS-1D Mark IV、EF70-200mm F2.8L IS II USM、1/1000、F5.6、ISO320、ホワイトバランス マニュアル、サンディスク エクストリーム プロ コンパクトフラッシュ カード





Moments
The Heat
～白熱の果てに～

← 楠堂 亜希・写真 Photograph by Aki Kusudo

長身を生かしたダイナミックなライディングが人気の中村友則選手。バイクを速く走らせるために、路面状況を即座に感じ取り、その上で身体を前後左右、そして上下と移動させてバランスを取りながら前に進む。

2011.8.7. 全日本モトクロス選手権にて、Canon EOS-1D Mark II、EF300mm F2.8L IS USM、1/640、F7.1、ISO125、ホワイトバランスマニュアル、サンディスク エクストリーム プロ コンパクトフラッシュカード

↑ 水谷 たかひと・写真 Photograph by Takahito Mizutani

真夏に行われる「鈴鹿8耐」、8時間の耐久レースということでその間、何が起るか分からない。急な大雨でもレースがストップすることはない。彼らは冷静に状況を見ながら、栄光のチェッカーを目指し、疾走する。

2009.7.26. 鈴鹿8時間耐久ロードレースにて、Canon EOS-1D Mark III、EF400mm F2.8L IS USM、1/640、F5.6、ISO100、ホワイトバランス オート、サンディスク エクストリーム IV コンパクトフラッシュカード



橋堂 亜希・写真
Photograph by Aki Kusudo

ランプから勢いよく飛び出し、空中で技を決め、美しさを競う。世界中で開催されるフリースタイルモトクロスの中心的人物として活躍する佐藤英吾選手は、国内FMXを黎明期から支えてきたバイオニアでもある。

2010.5.4. GO BIG. Canon EOS-1D Mark IV, EF70-200mm F2.8L IS II USM, 1/800, F5.6, ISO100, ホワイトバランスマニュアル, サンディスク エクストリーム IV コンパクトフラッシュカード



Moments
The Heat
～白熱の果てに～

↑ 水谷 たかひと・写真
Photograph by Takahito Mizutani

黄金色に輝くロードコース。漆黒に包まれるチェッカーフラッグまで残りわずか……。そんな中でもレーサーたちはひとつでも順位を上げようと懸命に走る。時間を切り取って表現できる耐久レースは撮影者にとっても魅力的だ。

2008.7.27、鈴鹿8時間耐久ロードレース、Canon EOS-1D Mark III、EF500mm F4.0L IS USM、1/500、F8.3、ISO100、ホワイトバランス マニュアル、サンディスク エクストリーム IV コンパクトフラッシュ カード

→ 水谷 たかひと・写真
Photograph by Takahito Mizutani

8時間を共に走り切ったチームメイトとの抱擁。それは喜びか、慰めか、彼らにしかわからない。だが、“感情”が溢れ出した瞬間を切り取ることができた私は幸せ者である。これがスポーツ写真の醍醐味だと思う。

2010.7.25、鈴鹿8時間耐久ロードレース、Canon EOS-1D Mark IV、EF70-200mm F2.8L IS USM、1/160、F3.2、ISO3200、ホワイトバランス オート、サンディスク エクストリーム IV コンパクトフラッシュ カード



勝利は自分で引き寄せるもの



水谷 たかひと / 写真 Photograph by Takahito Mizutani

フォトグラファーの視点 藤原選手は「絵になる男」だ。1993年から全日本で、98年から世界で実績を積んだベテランが、2011年から戦う場所として選んだのが、日本などアジア諸国を舞台にした「ロードレースアジア選手権」。タイやマレーシアなどの若くて活きのいいライダー達が競を削る場所でもある。現在、37歳。決して若くはない。だが、鋭く熱い走り、勢いのある若手を蹴散らし、年間チャンピオンをもぎ取った。表彰式では誇らしげに日の丸を背負い登場する姿が、言葉では表現できないほどさまになる。そんな藤原選手を撮り続けたいと思っている。(水谷たかひと)

レーシングライダー

藤原克昭

Manual-Tech BEET Kawasaki Racing

佐藤 寿宏 / 文 Text by Toshihiro Sato

藤原克昭・37歳。昨年、アジアロードレース選手権にカワサキのエースとしてフル参戦し、持ち前のガッツ溢れる走りでシリーズチャンピオンに輝いた。13年もの間、世界を舞台に戦ってきたライダーが第一線で戦い続けるモチベーションは、どこから来るのだろうか？

——藤原選手の走りは、常に全力を出している姿が印象的ですが、今、レースを戦う上でのモチベーションは、何なのでしょう？

「レースに勝とうと思えば必然的にいろいろな情報を集めなければならないし、必要なことが見えてくる。自分自身のトレーニング、マシンのセット、タイヤのチョイス、チームの和とか。歳を重ねていけば、モチベーションが下がるのが感じられるときが来るのかもしれないけれど……。37歳になっても、まだまだ「勝ちたい」という思いが強いからね。何に燃えているのかはわからないけれど、とにかくアツイ想いは昔から変わらない。それがモチベーションなのかな」

——長い間、走り続けることができるということは、それだけ藤原克昭というライダーが必要とされてきたことの裏付けです？

「必要とされて呼ばれたところで結果を残すのがプロ。それをやろうとしたときに何が必要かを考えて実行してきた。レースに対してONとOFFの切り替えが極端と言え極端かな。やるときはトコトンやるし、やらないときはトコトンやらない。レースになれば妥協はしない。練習や予選のときも常にレースを想定して、先の先を眺める状況でマシンをセットアップしていく。シーズンが始まってから歯車がかたんと修正するのが大変だからね」

——9歳でポケットバイクを始めて以来、フィールドは違っても、常にレースを戦ってきました。その中で苦汁をなめた時期もありました。

「レースに限らず人生も山あり谷ありでしょう。調子のいいときが、ずっと続くことは絶対ない。0から100まで階



横堂 亜希 / 写真 Photograph by Aki Kusudo

段を上がりっぱなしの人生なんてありえない。いいときは、何をやってもいいし、一度、ケガしたり、注目されなくなったりして落ちているときも、そこから這い上がるハングリーさが重要だと思う」

——落ちた状態から這い上がるときのコツはありますか？

「オレの場合は、ポジティブに考えるかな。例えばケガをした場合に「ここでケガをしてよかったんだ。ケガをしていなければ、もっと大きなアクシデントに遭っていたのだ」という感じで、常にいい方向に考えて、すべて自分に向いていると思うようにする。どうしても死と隣り合わせの世界にいるからね。でも、「運」も含めてレースに勝つための要素は自分で引き寄せるものだと思う。自分で引き寄せないと、いい環境は手に入らんんじゃないかな」

——昨年からアジア選手権を走っています。

「端から見れば、『世界選手権からアジア選手権に行くと勝つのは当たり前』なんだろうけれど、実際に走ってみてアジア選手権のレベルは高かったし、そう簡単なことではなかった。タイ人ライダーやマレーシア人ライダーに負けるわけがないという風潮もあったけれど、今年、全

日本ロードレース選手権 ST600クラスにタイ ヤマハのチャランポン・ボラマイとデチャ・クライサーが参戦し、実際にトップを走っている」

——初めて走るアジアのサーキットも多かったと思いますが、環境の違いなども難しかったのでは？

「郷に入れば郷に従え」じゃないけれど、アジア選手権ならではのルールもあるし、食事面やサーキットの環境など世界選手権にない難しさもある。とにかく、その場に馴染むことを心がけたね。それは世界選手権で学んできたことなんだけれど、コミュニケーションを取って、その地のやり方を学ぶようにしたんだ」

——今シーズンは2連覇を目指して開幕戦のマレーシア(5月12・13日)では、2レースとも制してダブルウインを達成。幸先のいいスタートを切りましたが、清成龍一という強力なライバルが参戦してきました。

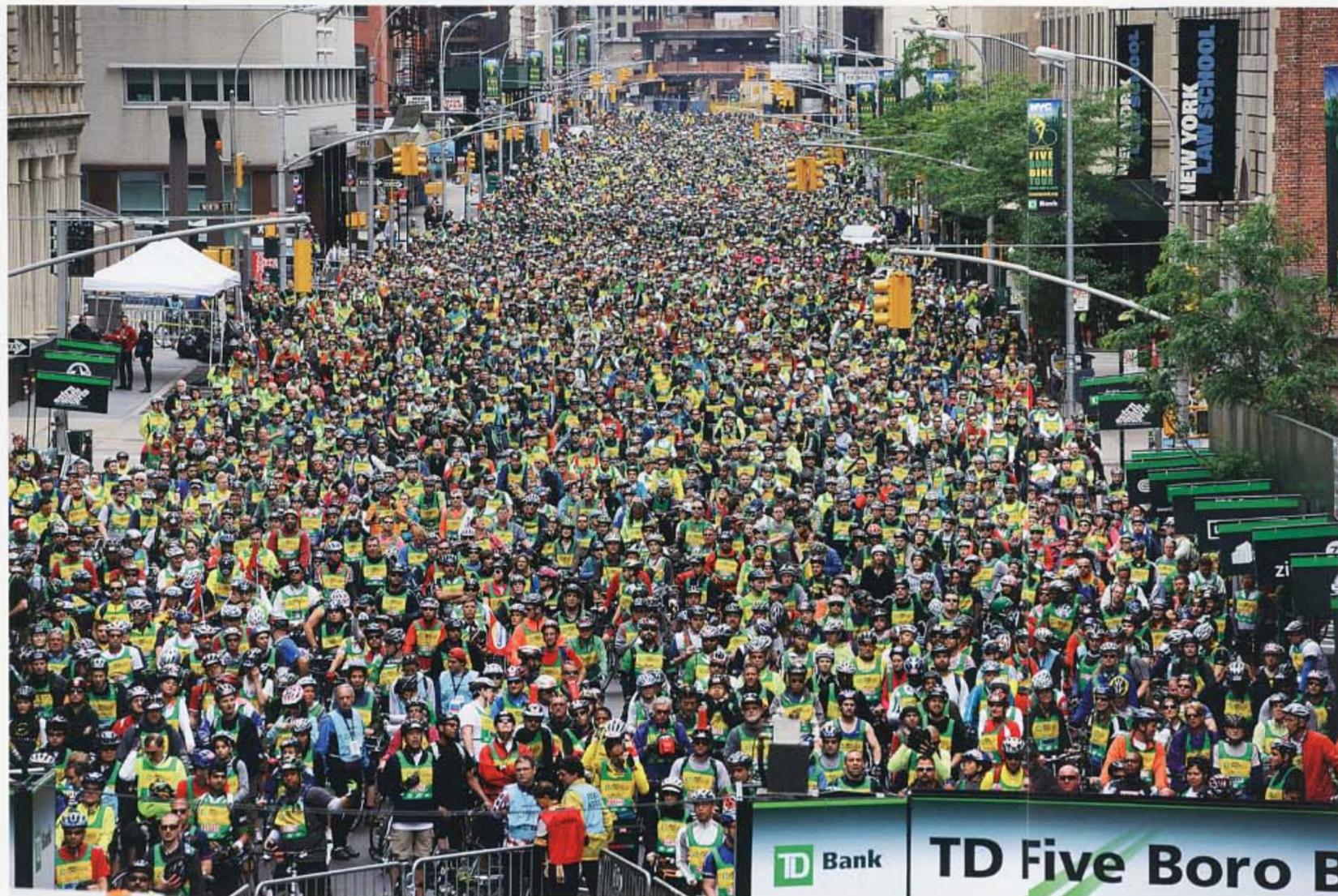
「今年はすぐに勝てるライダーとして清成を連れてきたし、ホンダがすごく力を入れてきたね。ただ、オレたちは昨シーズンを戦い抜いた経験がある。ディフェンディングチャンピオンとしてのプライドもあったし、「ホンダが力を入れればカワサキなんて……」と思われるのもイ

ヤだったから負けられない一戦だった。しかも両レースとも、すごいバトルだったから、勝ててうれしかった。ただ、レースは相手がいるモータースポーツだけれど、最大のライバルは自分自身だと思う。自分が決めた目標を、自分に打ち勝って実行できれば成績はついてくる。それは、これからも変わらない」

Photograph by Takahito Mizutani



藤原 克昭 (ふじわら かつあき) 1975年3月27日生まれ。山口県出身。9歳からポケットバイクを始め、ミニバイク、ロードレースと頭角を現し、92年に青木治親と組み鈴鹿4耐優勝。93年に全日本GP250クラスに参戦。95年にカワサキワークス入り、96年にスズキに移籍。98年より世界に参戦を開始。2002年にはスーパースポーツ世界選手権でランキング2位となる。10年まで世界で活躍し、11年はアジアロードレース選手権SS600クラスにスイッチし、見事チャンピオンに輝く。12年シーズンは、ディフェンディングチャンピオンとして2連覇を狙っている。http://katsukifujisawa.com/



グラウンドゼロを背後に、3万の参加者がアメリカ国歌「星条旗」の斉唱を行い、すべての無事を祈るよう43マイルの旅立ちに備えていた。

2012.5.6、ニューヨークにて、Nikon D800E、AF-S Nikkor 70-200mm、F 2.8G ED VR、1/100、F8.0、ISO400、ホワイトバランスマニュアル、サンディスク エクストリーム プロ CF カード



サンディスク
エクストリーム プロ
コンパクトフラッシュ カード 128GB

信頼性を考え、もちろんサンディスクからUDMA7対応「エクストリーム プロ 128GB」のCFカードを選択した。

高速書き込みが 実現させる連写性能

スタート地点に設けられたプレス用のリフトで上がり、通りの正面から見渡すと、一歩も二歩も引いているポジションながら、3万人の参加者の存在は圧巻だ。スタートを切っても行く先を争わないサイクリングでは、高速連写の必要性はないものの、その圧倒される数のサイクリストにシャッターを押す指が離れない、RAW+JPEGの場合、D800Eの撮影可能枚数は階調拡大設定をONにすると13コマと表示されるが、「エクストリーム プロ 128GB」を入れていると27コマまでも途切れることなく最高の秒4コマまで進んでくれる。その後もコマ連はやや落ちるが、シャッターが途切れることはまったくない。ストレスなく3600万画素のRAWデータを気持ちよくさばいてくれている。

サイクリングコースは6番街に入り、セントラルパークを抜け、マンハッタン島からブロンクスへ、そしてクイーン、ブルックリンを経て、スタテン島を駆け抜ける。走り終えた16時頃には携えた2台のD800Eとも2本目のバッテリー

も後半を消化中で、撮影枚数は1台で3000を、もう1台は2000を超えていた。

ただ単なる記録メディアの大容量化ではなく、これまでの高い信頼性に加えトータルワークフローでの利便性も提供してくれるサンディスクの商品群。それらのおかげで、私は翌日朝の帰国でありながら、昼のサイクリングに加え、夜のタイムズスクエアで電飾群による、ニューヨーク・キャピタルを味わうことができた。

Photograph by Shinichiro Tanaka



井上 六郎 (いのうえ りくろう)

1971年東京都生まれ。撮影スタジオに入社しその後、出版社のカメラマンとなる。自転車を始めとするスポーツシーンの撮影を経験し、97年フリーランスに。以後、自転車メーカーやスポーツアパレルの広告や雑誌等で活動中。ツール・ド・フランスを95年から撮影し2006年、写真集『マイヨ・ジョーヌ』（講談社）を出す。

プロカメラマンが選ぶ〈サンディスク エクストリーム プロコンパクトフラッシュ カード× Nikon D800E〉

摩天楼に集う銀輪を高解像度で 写し撮る

井上 六郎 / 写真・文 Photograph&Text by Rokuro Inoue

今日の主役は 3万人の市民サイクリスト

3万人のサイクリストがニューヨークを駆ける「TD FIVE BORO BIKE TOUR a Bike New York Event」のスタートシーンだ。朝の7時を過ぎ、チャータストリート埋め尽くすように参加者が並んだ。このイベントは1977年から続く

市民対象のサイクリングで、今年の大会に自転車好きの私は実際にコースを走り、その実景や雰囲気撮影してきた。

日本での集客のため撮影した写真がポスター大で使用される可能性もあって、今春、デビューしたばかりで3600万画素のニコン D800E を携え、全カットをRAWモードで撮影した。しかし36メガピクセルのD800Eともなれば、圧縮

RAWモードでも1カットあたり30MBものファイル容量となってしまう。自転車の移動ではとにかく機材をはじめとした荷物を極力抑えたく、メモリーカードも1枚のカードで事足りるよう大容量のものが欲しい。

デジタルカメラのメディアなど、どれも同じだと思っていた。色が変わるわけでもなく、容量が同じなら撮影枚数も変

わらないからだ。しかし、7~8年ほど前にフィルムカメラと同じ連写速度になったデジタルカメラが出現した際、定評のあるサンディスクのカードを使ってみた。このとき得た安定感にすっかり安堵し今に至った経験を持つ。これこそがメモリーカードの真の姿だ、と。

そして今回一段と大容量のメディアを必要とする事態に、容量全域にわた

使っているだけで「さすが」と思われる
メモリーカードは少ない。

カメラの性能を最大限に引き出す、
最大95MB/秒*1の超高速データ転送。

究極のSD™カード、サンディスク エクストリーム® プロ™ シリーズ



最大 90 MB/秒 の書き込み速度
最大 95 MB/秒 の読み取り速度

サンディスク エクストリーム® プロ™
SDXC™ UHS-I カード 64GB

サンディスク パワーコア™ コントローラ搭載

【信頼性】 インテリジェントなデータ管理を可能にする、業界最高水準のエラー訂正コード

【UHSスピードクラス1】² フルHD動画³の撮影にも最適な、UHSスピードクラス1に準拠

【究極のスピード】 最大95MB/秒の超高速データ転送を実現

【耐久性】⁴ 防水、温度、衝撃、X線などの過酷なテストをクリアし、極限の状況下でも正確な動作を実現

【長寿命】 ウェアレベリング技術により、データの保全とカードの寿命を最大化

【テクノロジー】 サンディスク独自のパワーコア™ コントローラにより、効率的かつ迅速なデータ処理が可能

【大容量】 最大64GBまでの大容量で、高速連写による膨大な画像データや、フルHD動画も余裕で保存

【絶対の自信】 絶対の自信に裏付けされた、無期限保証⁵付き



サンディスク イメージメイト®
オールインワン USB3.0 リーダー/ライター

超高速性能・大容量

Extreme Series

エクストリーム シリーズ

サンディスクはプロカメラマンの82.4%*から「安心のブランド」と評価されました。*2010年2月当社調べ。詳細は当社Webにてご確認ください。http://www.sandisk.co.jp/leader

サンディスクはフラッシュメモリーカード世界*・国内**シェアNo.1ブランドです。

サンディスク

検索



* 2010年Gartner調べ (Gartner Dataquest No. G00211697 03/25/2011)。** GIK Japan調べ (国内の有料家電量販店販売実績集計/2011年)。*1 最大読み取り/書き込み速度の数字はサンディスク社内テストの結果に基づきます。ホスト機器によって読み取り/書き込みの速度は異なる場合があります。*2 UHSロゴは、HD動画を最速に録画するためのスピードを有するUHSスピードクラス1を意味します。*3 フルHD動画(1920x1080x30fps)、HD動画、3D動画のサポートについてはご使用の機器、ファイルサイズ、解像度、圧縮率、ビットレート、撮影内容、その他の状況に依存します。*4 詳細は当社Webにてご確認ください。http://www.sandisk.co.jp/Corporate/proof/ *5 保証内容に基づきます。ドイツ及び無期限保証を認めていない地域においては30年保証。1.1メガバイト(MB)=100万バイト、1ギガバイト(GB)=10億バイト。記載された容量の一部はフォーマット及びその他の機能に使用されるため、すべての容量をデータ保存のために使用することはできません。2. 機器によっては、SDXCカードやUHSに対応していない場合があります。詳細は機器のメーカーにお問い合わせください。3. SanDisk, SanDiskロゴ, SanDisk Extreme, サンディスク エクストリーム, SanDisk Extreme Pro, サンディスク エクストリームプロ, イメージメイト, 及びパワーコアは、米国及びその他の国におけるSanDisk Corporationの商標または登録商標です。SDXCのマーク及びロゴはSD-3C LLCの商標です。その他の商標も特定の目的のためのみ使用されるものであり、各種利権によって商標登録されている可能性があります。